

2011年イカ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

		数				量								
		漁獲		産		地		輸		入		輸		
年	スルメイカ	アカ	イカ	スルメイカ	アカ	イカ	マツ	コウ	調製品	出				
	生	冷近	冷遠	生	冷	生	イカ	イカ	イカ	イカ	イカ	イカ	イカ	
22	198.1	16.8	95.9	34.7	1.1	0.0	18.0	59.4	18.9	44.2	31.4			
23	208.8	16.6	116.7	38.4	1.1	0.0	10.6	73.9	16.0	48.3	39.9			
%	105	99	122	111	100	125	59	124	85	109	127			
		数				量								
		東京		在庫		消費支出		加工品						
年	スルメイカ	アカ	イカ	スルメイカ	アカ	イカ	生(貯)	イカ	イカ	干スル	燻	缶詰		
	生	冷	甲	イカ	イカ	その他	イカ	製品	塩辛	メ	製			
22	10.8	4.4	0.3	31.1	5.9	22.8	2,583	35.04	21.3	6.293	11.2	2.419		
23	11.5	4.1	0.3	33.2	5.0	24.1	2,469							
%	106	93	91	107	84	105	96	0	0	46	0			
		価				格								
		産地			輸		入		輸		東京		消費支出	
年	スルメイカ			アカ	イカ	マツ	コウ	出	スルメイカ		甲イカ	生(円)		
	生	冷近	冷遠	生	冷	イカ	イカ	イカ	生	冷	冷	イカ		
22	225	282	219	120	212	433	661	155	426	338	601	2,494		
23	197	269	246	126	249	405	757	197	426	396	687	2,374		
%	88	95	112	105	117	94	115	127	100	117	114	95		

スルメイカの資源

平成年代に入って日本近海のスルメイカの漁獲は、平成10年を除くとかなり安定的に推移しており、20～40万トン台の高い数字を記録しているが、本年は20万トンを若干上回った。

太平洋側の漁獲の殆どを占める冬生まれ群（冬季発生系群）の資源量は、1981～1988年の間は30万トン以下の低い水準で推移していたが1989年以降増加に転じ、1996年には133.4万トンにまで増加した。その後は大きく変動する年はあるものの、概ね80万～120万トンの高い水準で推移した。調査船調査結果から推定した2011年の資源量は89.8万トンであった。親魚尾数は資源量と同様に1980年代後半から増加傾向を示し、1993年には15億尾に達した。2011年級を産んだ親魚尾数は10.6億尾であった。資源水準は過去33年間の資源量の推移から中位、動向は2007～2011年の5年間の変化から減少と判断されている。

秋生まれ群（秋季発生系群）の資源水準は、1980年代前半は減少傾向にあり、1980年代は主に50万トン前後（1981～1989年の平均値は51.2万トン）、1986年は22.4万トンであった。1980年代後半以降は増加傾向となり、1990年代の平均資源量は108.7万トン、2000年前後には主に150万～200万トンとなった。2004～2007年は100万トン前後に減少したが、2008年以降は概ね120万～170万トンの高水準（2011年は135.1万トン）にある。漁獲割合は、1980年代半ばは35～40%、1990年代は30%以下、近年は20%前後に減少し、2008年以降は10.9～13.4%であった、といわれている。

産地水揚量と価格

23年の日本近海のスルメイカ水揚量（継続漁港）は生11.7万トン（前年：9.6万トン）、冷万3.8トン（前年：3.5万トン）と生鮮・冷凍とも増加した。

TACに基づく漁業種別漁獲量はトロール4.4万トン（前年：3.8万トン）、まき網1.12万トン（前年：1.41万トン）、釣りの冷凍4万トン（前年：3.1万トン）であったが、釣りがほぼ前年並み、トロール増加、まき網はやや減少前年並み、中型船凍船増加であった。

冷凍は、本年も昨年同様当初北陸船団が日本海スルメイカ主体の操業をし、青森、北海道、岩手船団がアカイカ（ムラサキイカ）操業であった。しかし、1次航海は過去にない不漁で水揚げも近年では最低を記録した。また年明け後に操業する前年度漁期の最終航海は比較的好調に推移したため、年度明けの不漁をカバーした格好となり、水揚げは前年を上回った。また、秋から冬場の漁も前年同様皆無で推移した。

生スルメイカの海域別漁獲量は、日本海19,905トン（前年：10,339トン）、太平洋87,082トン（前年：74,734トン）、オホーツク9,509トン（前年：4,188トン）で、本年も引き続き太平洋・日本海・オホーツクとも増加したのが特徴である。また九州北部での漁獲は7,396トンで前年（3,658トン）を九州でも上回った。

本年も中型船凍船は、当初スルメイカとアカイカ操業とに分かれたが、秋口に本年は初めてオホーツクに出漁し、まとまった漁獲・水揚げをみた。

また本年も業界では、従来からスルメイカ一極集中の排除、三極漁場の選択的移動、漁獲努力量の分散、急速凍結によるブロック製品の品質向上等付加価値の高い魚種や製品作りの奨励、サイズ選択、IQFの促進等は定着している。

産地価格は、生鮮197円（前年：225円）、冷凍は269円（前年：282円）となり生鮮・冷凍もやや下落したが、冷凍を始め比較的堅調であった。

本年の特徴は、①本年の冷凍スルメイカは水揚げも増加したが、IQF生産も前年を上回った、②本年のイカ類の魚価は当初在庫が少なかったが、夏以降国内漁が生・冷生産も活発となり急激に在庫も回復し、上半期堅調、下半期はやや軟弱相場に変わった、③本年の冷凍スルメイカ（R）のサイズ組成は、21～25尾サイズが17%で前年（30%）を大きく下回り、26～30サイズも34%で前年（24%）を上回った。サイズ組成も20尾以下の大型は6%で前年（27%）より大きく減少し、小型化が顕著であった、④AR、FORの漁場がなくなり、ペルー水域、NZ、ロシア等になり海外イカ類の漁場はかなり狭まっている事情に変化はない、こと等である。

在庫量

23年は昨年より更に少ない4万トンの在庫から始まり、本年も例年通り6、7月に最低になったが、その数量今年も2万トン割れとなり昨年同様近年では最も少ない数量であった。その後、8月以降は例年どおり増加に向かった。そして秋口に入るとオホーツクや羅臼沿岸で記録的豊漁となったこともあり在庫は大きく膨らんだ。この結果、越年在庫は4.9万トンと昨年をかなり上回る在庫となった。平均在庫量も、3.3万トンで、引続き前年（3.1万トン）をやや上回った。

消費地入荷量と価格

スルメイカの東京消費地入荷量は、生1.2万トン（前年：1.1万トン）、冷凍4.1千トン（前年：4.4千トン）であった。本年は近海の生イカ漁が順調であったため生鮮の入荷が前年をやや上回った。価格は、生426円（前年：426円）、冷396円（前年：338円）で冷凍が昨年以上に堅調相場が続いた。

消費支出でみると購入数量、購入金額とも今年も前年を下回った。

NZイカ

23年のNZイカ釣漁は、本年は2隻、1.2千トンで前年（2隻、0.8千トン）をやや上回った。

産地水揚量（全漁連）は、1,320トンで前年（1,085トン）をやや上回った。

価格は246円で前年（219円）をやや上回った。

アカイカ

本年は昨年以上の初漁期から低調な漁模様であり、秋から冬にかけての漁も昨年同様極めて低調で漁皆無であった。ただ年明け後の三陸近海での漁は、好調で前年の3倍の漁獲であった。また沖合（東経170度以東水域）の漁は震災の影響で出漁はなかった。小型船による近海での漁獲は今年の3トンと変わりなく極端に少ない5トンの水揚げに終わった。

全漁連集計によると、生5トン（前年：3トン）、冷4,288トン（前年：3,766トン）であった。

産地価格は、生115円（前年：178円）、冷407円（前年：514円）であった。

海外アカイカは、ペルーのみ（200海里内）の操業であったが、4隻-9.97千トンで、昨年実績（4隻-17.1千トン）を引続き大きく下回った。

本年のペルーアカイカの耳とりのサイズアソートは5尾以下が99%（昨年5尾以下96%）と大半を占め昨年同様に超特大サイズが多かった。今年の中でも特大型サイズ（1-2尾サイズ）が97%と多かったが、水揚げの半減もあって堅調相場が続いた。

産地水揚量（全漁連）は、6,291トンで前年（14,205トン）をかなり下回った。

価格は142円で前年（132円）をやや上回った。

輸出入

23年の輸入イカ（コウイカを除く）は、中国主体に7.4万トンで下半期に搬入が多く伸び前年（5.9万トン）をかなり上回った。

価格は、405円と搬入増もあって前年（433円）を下回った。

冷凍イカの主要輸入国は、中国33,666トン（前年：26,632トン）、ペルー11,216トン（前年：4,832トン）、タイ7,701トン（前年：7,594トン）、米国5,813トン（前年6,283トン）、ベトナム5,000トン（前年：5,360トン）、インド1,697トン（前年：2,134トン）、フィリピン950トン（前年：1,119トン）、アルゼンチン558トン（前年：395トン）、NZ270トン（前年：506トン）で前年同様中国のシェアが高かったが、今年はペルーからの搬入が目立って多かったが、ARやNZからの搬入は漁模様を反映し減少したのが特徴。

23年の輸出は、4万トンで前年（3.1万トン）をかなり上回ったが、本年は中国（1.6万トン）、ベトナム（1.2万トン）の両国で2/3を占めている。

モンゴイカ

23年のコウイカの輸入は、1.6万トンで前年（1.9万トン）を下回った。

輸入価格も、757円で輸入量の減少もあって前年（661円）を上回った。

東京消費地入荷量は、0.3千トンで前年（0.3千トン）をやや下回り引続き漸減傾向が続いた。

価格は、687円でほぼ輸入価格の傾向と同じで前年（601円）を上回った。